クラスマス担任
の経験

研究とつなぐ試み

過去から現在へ
私の展望と課題

久々に地域の小さな図書館に行ったり。カウンターの前に立って、中の人や対応してくれるのを待っていると、
ニーテールほど離れた椅子のあたりから、こちらを見つめているまっすぐな視線を感じる。その方向に目を移すと、
数か月前まで私が自宅で続けていた学習書に来たCと
いう三歳の女の子がしっとりと私を見ていて、私が思わず
「あっ」と驚きと驚きの声をあげると、Cは、「そうそう、
うなずいてみせた。『ちょうちん』。うんうん。『元気』。
というように目を大きくしてニコニコ笑って何度も
お便りの類をもらった後、『Cちゃん、またね』と
手を振って、見たい本のある書架へ移動した。
カウンターの人にお呼びされ、私は予約の本を受け取ったり、
声を押さえながら、そんなささやかな取り引きをした。

Cは時折、書架の切れ目から現れて私のか間を消え
くつくつ」と笑う。「うわー、また会えたねー」
と、父親らしき人に私を間われて、Cが、「あの
授業、一緒に遊んだね。あのね、Cたちをねえ、待って
ね」。
たくなる。ひだまり文庫で説明しているのが聞こえて、『また会えた』『一緒に遊ぶ人』って私と大人の責任をがんばって行われるの。かつて今も、私からは共通することをしているかもしれない。と、ふと思った。
今年度、私はお茶の水女子大学の幼保プロジェクトの一環で、附属幼稚園の三歳児・かわの組の担任として校や大学での保育者養成系授業担当の非常勤講師をしていた。昨年度までには、未就園児を対象に保育者との時間と場所を家庭文庫としてわずかながら確保し、その他、地域や児童病児子保険における活動などにも携わっていた。
幼稚園では新任であり、周囲は困惑させたり呆れさせたりしているかもしれません。形を適応させた年齢、地域、児童の状態で活動などにも携わっていた。
一方で、二十人全員に、どうやって立つのか、どうやって歩くのか、何をどのように保育者同士の意志の疎通を図るかということは、日々の課題として捉え、謙虚に考えていかなければならず、子どもたちの成長についても、保育者同士のつながり、保育と研究とをつながりと、文字通り「つながる」だろう。保育の場の安定のために自らが実験的要素をもとに自分の立場を生かし、いろいろ試していきることで、協力の仕方・連携の仕方、可能なら「つながる」だろう。保育の場の安定のために自らが広がりはさまざまな見えてくるように思う。
そのために、三歳児の保育をいかに記録化するか、
保育計画を立てていくか、という、まさに幼稚園におけ
る保育者の恒常的な課題を、研究に反映できるように
日々調整していく作業が不可欠になる。記録は、保育者
のさらなる豊かな保育のための自己研鑽の意味をもと
うが、同時に、保育者が記録によって、ひとり当事者と
育者間に関連、今の確かさを支えられながら未来へと
拓かれる。また、保育研究へと拓かれていくことになると
考えられる。
たとえば、日々の保育を、子ども一人ひとりを捉えて
記録する。という方法がある。また、週案や目案に基づ
くなどして、クラスや園全体の動きの中で、個々の活動
なり、展開された遊びなりを総括的に記録していくこと
できる。さらに、そこで起こったことやある子ども
について深く考えたい場合に、あえて事例として切り
取り、どのような形式であっても、それは生かされた体験
の中で事例として書かれるのだけど、ここにあえて、試行錯誤
の意味を問う一方向で、記録されなかった状況や課題
が厳としてある、ということに触れていきたい。

◇七月十一日の記録（Ｔとせきらぎに入る）

Ｔ（三歳男児）が、気持ちのよさところにする友達と遊
んで、そこで遊ぶ子どもを何の脈絡もなく叩いたり蹴ったりす
のを。私は時々とんでいて論したり、やられたら子を慰め
たりして気にしつつも、他の子どもと遊んでいてしっかりと
かかわらないまましばしば過す。部屋の中の遊びが一段落つ
った後、M先生が部屋に入ってきたのを確認して、一日を
 Mandarin
「T、クモノ、だね」と言うと「うん、クモノの果」を言いながら近づく。「Tが必要で、私を呼んで近づく」。Tが見ている砂場横の植え込みを私も見てみると、クモノの果が張られている。「クモノは、この時のTにとって、私と密につながる活動のキーワードの一つになっていた。この日の十日ほど前には、私と一緒、五匹の家族のクモノを作って壁に貼っているし、一週間ほど前に手製の虫カードを作り、中にクモノのカードも何枚かあった。」

「T、クモノの果だね」と言うと「うん、クモノの果」とT。「T、クモノの果だね」と言うと「うん、クモノの果」とT。お水の方にもあるかもしないよ。「一緒にに入ってみる？」「一緒にに入ってみる？」と手を差し出すと、手をつかないで水に入る。水には、同じかわせらぎの片面は、ある高さから上が主な斜面になっている。水が植わっている。

見ると、低い木のあらこそにクモノの果が張られている。

「あ、あら、こっちにもクモノの果」と私が言うと「ね、見だい。抱っこして」と言うので、自分と向き合う胸のあたりを抱えて抱き上げ、「はら」とクモノの果を見る。顔と顔が触れるくらい、距離が近くなる時Tは、普段の顔と顔を近づけるための威勢のいいや、乱暴なものに伝えている。Tをずっと抱いたまませきらぎにいて、クモノの果を充分に見られて、抱えられていた腕から、自らするりと降りるまで、ごくごく近くの壁橋を、まるで遠くで聞くように「一人でクモノの果の世界に浸る」。「T、クモノの果、見えたね」と私が言うと「うん、いっぱい見えた」と、はずんだ声でTが応える。砂場に戻っていく足取りが、心地良い軽い。砂場でパケに黙々と砂を満たし始める。

時間にすれればおそらく、七、八分のことであったのである。沙のような状況を、一学期、月に二回の頻度でクラスに入って観察をしているKさん、以下のように記している。
問いかれている問いと日々の案件との狭間で

保育後、KさんとせせらぎのTとのかかわりについて非常に近い気持ちをわかちもてたことはとても貴重だ
と私自身も、Tの想いに寄り添えた記憶をまだ

体感として自らにとどめて記録できたことは信じで
共にすることはないかった。なぜなら、そこでこのせせら
ぎでの遊びに関して、翌日以降に向けて共通に考えてい

かなければならなかった具体的な課題が、眼前にあったから

それは、たとえば他に予定していた活動（この日はう
ちわの色）もこなし、着替えや後片付けが物理的
に大変になる水遊びをとっさにどう展開し、保育者どう
しはどう対応し連携していくかを話し合うことであ

の保育が子どもにとって中間半端なものにならぬよう、
方についても、ペテラノの先生を中心に確認できたこ
と、とても意義のあることだと思えた。

しかし、差し迫る課題を処理していくことに疲弊して

保育と研究との間で、模索はまだまだ続きそうである。

（お茶の水女子大学）